

『ふしぎの植物学』

(中公新書、2003年7月)

理工学部教授 田 中 修

本書は、昨年7月下旬に、出版された。その後、阪神タイガースが、リーグ優勝を決めた。そこで、本書にある話題と阪神タイガースの優勝が合体して、一つのクイズが生まれた。

(問題) 20世紀に、ナシの「二十世紀」が一世代を風靡した。では、21世紀に、ナシの「二十一世紀」は生まれるだろうか。「阪神優勝」をヒントにして、答えてほしい。

生まれない。

もう生まれている。

今から生まれるだろう。

おいしいナシを求めて、新しい品種づくりが行われている。だから、新しい品種「二十一世紀」が生まれる可能性は高い。

「21世紀は始まったばかりで、まだ100年近くもある。だから、今、この質問に『生まれない』が正解のはずがない」といううがった見方もできる。

ところが、正解は、の「生まれない」である。実は、「二十一世紀」という言葉をつけた商品がすでに商標登録されているのだ。ヒントの「阪神優勝」という四文字の言葉が、商標登録されており、阪神球団がこの言葉を使えないことが発覚して騒ぎになったのと同じである。

本書には、このような内容のコラムを含め、身近な植物のあまり知られていない話題を、多く取り入れた。その結果、ある書評では、「トリビアの泉」風に、「へえ度」が高い本とされた。しかし、本書は「へえ度」の高い話を紹介するのが目的ではない。それらをきっかけに、植物の能力、知恵や工夫に気づいてほしかったのである。その意は、多くの新聞や「週刊ポスト」などの週刊誌が、正しく汲み取ってくれた。

発売と同時に、日刊ゲンダイが、「植物は光合成ですくすくと育つ。しかし、大自然の中にあつて、植物たちはストレスを感じることはないのだろうか？暑い真夏の盛りに、植物たちは過酷なアウトドア生活を送っている。実は、こ

れがいちばんのストレス。植物は、葉っぱにある気孔から体重の何倍にもなる水分を蒸散させるが、暑くなると、その量はどんどん増えていく。すなわち、植物は、汗をかくことで暑さをしのいでいるのだ。身近にありながら、意外に知られていない植物の世界を一挙公開。」と、本書を紹介してくれた。

朝日新聞は、「植物の生き方は知恵と工夫に満ちている。よく観察すると、動物の五感のような能力さえある。食物連鎖でみれば、植物はあらゆる生命の基盤である。人類には、いまだに光合成の工場をつくる技術はない。著者が言うように、科学は一枚の葉っぱに及ばない。」と、本書の書評を掲載してくれた。

神戸新聞は、「二酸化炭素と水を材料に太陽光でデンプンやブドウ糖を生み出す光合成。工場であれば、地球で増え続ける二酸化炭素や食糧問題の解消へ大きく前進するはずだ。だが最先端の科学技術でさえ、光合成は手に負えない。『たった一枚の小さな葉っぱがやっている反応を真似することができない』と著者はいう。甲南大学教授で植物生理学者の著者は、一般の人が素朴に思う『植物はストレスを感じるのか？』『動物に食べられることの多い植物は身をどう守っているのか？』『五感はあるか？』などの疑問を分かりやすく解いていく。目からウロコが何枚か落ちて、身近な観葉植物を見ても新鮮な感覚で接することができるかもしれない。」との書評で読書意欲をそそってくれた。

後日、神戸新聞は、再び、私と著書の大きな写真とともに、「ふしぎの植物学」の中に潜む「植物のふしぎ」について、紹介してくれた。

「21世紀は、植物と人間の共生の時代」と言われ、「緑を大切に」と語られる。しかし、そう言われるほどに、植物の生き方に興味がもたれていない。本書に込められた「植物のふしぎ」がきっかけとなって、植物の生き方と私たちのかかわりを考えていただけたらと願う。